

# 家庭における生活意識の構造

## ——測定尺度の構成——

児童学科 藤村和久

抄録：家庭における生活意識を測定する6つの測定尺度、①家族への情愛性、②向社会性、③日本の宗教性、④自己中心性、⑤知的生活志向性および⑥虚飾性を構成し、その心理学的意味について、人格発達の視点からも論じられた。これらの測定尺度の信頼性係数は、0.836～0.753であった。

索引語：生活意識、人格発達、尺度構成

### 【問 題】

不登校、いじめ、学級崩壊、少年・少女犯罪、少女売春や出会い系サイトでの女子の犯罪被害、育児ノイローゼ、児童虐待等々、マス・メディアで連日のごとく報じられる子どもにまつわる問題は深刻を極めていく。これら子どもにまつわる諸問題に対して、いろいろな専門分野から問題解明へのアプローチがなされたり、行政や市民活動的な防止のための試みがなされたりしている。それほど、これらの問題は根が深く、様々な要因が複合的に絡み合った今日の社会状況の所産と考えられる。

このような問題行動の多くは他者との社会的関係のなかでいとなまれる人格発達の過程で生じた問題として理解できる。Erikson (1959, 1963) はパーソナリティの心理・社会的な発達を漸成理論として展開した。その発達過程において、親・養育者との社会的関係が極めて重要な役割を担っていることが示された。また、園原 (1980) は、自律的な自己の成立には、「他者との関係がきわめて大きい影響をもっている」と述べ、他者との社会関係の中において個の体系が成立し、それが安定化あるいは変化していくことを論じている。また、Eizenberg & Mussen (1989) は「子どもたちは自分の文化に適応的で、そこで身につけることが期待されている行動型や動機、個人的特徴、行動傾向、価値、社会的反応などを習得していく」と述べ、一般的に子どもの初期のころは両親、きょうだいなど身近な家族、その後はそれに加えて友人仲間、学校、マス・メディアなどが子どもを社会化するはたらきをしている。そして、社会化を支える基本的なメカニズムとしてモデリング、報酬と罰、理由づけ、話や説明を挙げ、社会的世界や規範、期待などを認識可能ならしめることができるような人々との接触や経験が重要であると論じている。人格の諸側面についての親や家族が持つ人格的特性が子どもの人格発達に及ぼす影響について数多くの研究がなされている。詫摩・依田 (1962) は家族関係と子どもの性格形成との関係を論じているし、東・柏木・Hess (1983) からは日本とアメリカの母親たちの子どもに対する期待や態度の違いが、母親たちの養育・教育行動の違いとなって現れることが汲み取れる。また、金児 (1997) は宗教観を表す項目群を因子分析することによって、「向宗教性」、「霊魂観念」、「加護観念」、「個人主義的宗教」、「近代合理主義」の5つの宗教観因子を抽出し、大学生とその両親の間に宗教観尺度得点に有意な相関が見られることから、子どもの宗教観は親の宗教観の反映であると指摘している。Yarrow, M. R., Scott, P. M. & Waxler, C. Z. (1973) はモデルの養育性が子どもの養育性の形成に大きな影響をもっていることを明らかにした。van Bakel and Riksen-Walraven (2002) は親

の子どもとの相互作用の行動の質は、親のパーソナリティ（自我の弾力性 ego-resiliency）、パートナーのサポート、子どもの気質などによって規定され、そしてこの相互作用の質が子どもの発達（発達の指標として認知発達と愛着を用いた2つのケースについて）を規定するというパスモデルを、共分散構造分析法を適用して検証した。

子どもの人格発達は、子どもと親や家族、それを支える人たちとの人格どうしの相互作用の過程で織り成されていくものである。その相互作用の質はそれぞれの人格特徴によって規定され、その質の違いが異なった結果をもたらすものといえる。たとえば、東・柏木・Hess (1981) の調査によると、母親の教育年数、社会階層が子どもの知的発達と正の有意な相関を示し、日本では何の理由もいわずに親の権威や地位に訴えて子どもを統制しようとするしつけ方略と子どもの知的発達が正の相関を示した。しかし、この結果は、母親の教育水準と社会階層と知能水準は互いに正の相関を持つものと考えられるし、母子の知能水準は遺伝的に相関を持つものといえる。したがって得られた母親の教育水準、社会階層と子どもの知的発達との相関性は単に知能水準の反映とも考えられる。むしろ、しつけ方略は母親側の、たとえば教育観、人生観、性格、知的水準、価値観、情愛性など、また子ども側の、たとえば気質、知的水準、愛情に裏打ちされた母親への信頼感、自律性等々、互いの人格諸変数の組合せによって母子間の相互作用の質が規定され、得られる効果も異なることが考えられる。

以上のように、子どもの人格諸特性の発達と親の人格諸特性との関連性がみられる。ところで、人格 (personality) とは、「人の、広い意味での行動（具体的な振る舞い、言語表出、思考活動、認知や判断、感情表出、嫌悪判断など）に時間的・空間的一貫性を与えているもの」と定義される（神村, 1999）。また、発達について、西平 (1993) は、「発達の原語であった development や Entwicklung という言葉が、たとえば、ネガフィルムの現像を意味しているように、巻物を解いてゆくこと・潜在的に含まれていたものが開花し発現してゆくこと、という意味合いを強く持ち、……」と述べている。潜在的なるものがどのように開花するかは、子どもにとって重要な他者との相互作用の質によものといえる。その質を特徴づけるのが互いの人格的特徴なのである。

子どもにとっての重要な環境である家庭という場において、それを構成する親や家族が何を是とし、何を非として生きているのか、つまり親（ないしは養育者）の生活意識の一貫した在り方、少なくとも子どもが認知している親の生活意識のあり方が、子どもの自我のあり方を方向づけているものと考えられる。

本研究は、家庭における生活意識が他の人格諸特性と如何なる人格構造的関係にあり、人格諸特性を統合する自我の働き方に関わっているのかを明らかにし、そして親や養育者の人格構造が子どもの人格発達にどのような影響をもたらすのかを明らかにするために、まず生活意識を測定するための尺度を構成することを目的とするものである。測定尺度を構成するにあたって、生活意識を表す項目が一般的、抽象的な内容になるのを避け、一貫した行動傾向 (Eysenck のいう習性水準の行動) として捉えるため、できるだけ家庭における生活意識の表れとなる具体的な行動傾向として表現するように心がけた。なぜなら、一つには、一貫した傾向であるからこそ子どもの人格発達を方向づける機能を持ちうるし、測定論的には他の人格諸特性（たとえば性格特性など）との測定水準を揃えておいた方が個々の特性の人格構造的な機能を明らかにする上で便利だと考えるからである。

そして、尺度構成のための調査は大学生を対象として行った。なぜなら、親の生活意識が子どもの生活意識の形成とどのような人格構造的な関連を持ち得るのかを知るには、少なくとも子どもが親の生活意識をどのようなものと認知しているかが重要性をもつと考える。つまり、親子間の相互作用過程において、親自身が自分の生活意識をどう認知しているかよりも、子どもが親の生活意識をどう認知しているかが親子間の相互作用過程で重要性を持つと考えるからである。このような理由から、まず青年期後期にある大学生の家庭における生活意識の構造を明らかにし、そ

の枠組みに照らして親の生活意識をどう認知し、それらが子どもの生活意識とどのような関連性を持ち得るのかを明らかにしたいと考える。本研究では、まずそのための尺度構成を目的とする。

## 【方 法】

### ・項目作成

生活意識の項目作成にあたっては、価値観（辻岡・村山，1975；秋葉，1995）等を参考にしながら、家庭という生活の場におけるより具体的な行動傾向として表現した。なぜなら、個人の生活意識は個人の日常の行動を方向づけるものであるが、項目の内容を一般的、抽象的なものにすることによって生活意識と実際の行動との関連性が把握しにくくなるきらいが生じるのを避けるためである。そして、生活意識の表現として、「でありたい」ではなく「……である」という個人の実態を表すよう努めた。できるだけ多くの行動傾向をリストアップし、最終的に215項目を用意した。

### ・調 査

大阪府下の私立大学の学生260名（男子80名，女子180名）に対して作成した215項目の活意識項目からなる調査用紙を授業中に配布し回答を求めた。得られた各項目の反応を「全くそうでない」から「全くそうである」までを、1～5に配点した。

### ・分 析

- ① 215項目間の相関行列から固有値の Scree グラフにより、まず3因子を主因子法による因子分析法によって抽出し、Varimax 法さらに Promax 法によって因子軸の回転を行い、各因子ごとにパターン値の大きい項目でしかも当該因子以外の因子に対してほとんどパターン値を持たない項目を10項目ずつ選択した。残りの185項目間の相関行列から同様にさらに3因子を抽出し Promax 解パターン値から各因子それぞれ10項目を選択した。そして、残りの155項目をさらに分析を行ったが、先に抽出した同じ内容の因子や解釈のしにくい因子、あるいは少数の項目からなる因子等のため、以後の分析は、最初の6因子かける10項目を対象とした。
- ② 選択された10項目×6因子，計60項目の相関行列を求め、固有値の Scree グラフにより6因子を確認し、6因子による因子分析を行った。因子分析の手続きは、先と同様、主因子法の繰返しによる共通性の推定、主因子解、Varimax 解、Promax 解を求めた。Promax 解より、2因子以上に相対的にパターン値を有する項目を除き、最終的に各因子8項目を選択した。
- ③ さらに、選択された8項目×6因子，計48項目間の相関行列を上記と同じ手順によって因子分析し、確認された因子パターン行列が Table 1 である。
- ④ 48項目間の相関行列から得られた48項目の因子パターン行列から、各尺度8項目からなる6つの生活意識測定尺度を構成し、被験者260名の生活意識尺度得点を算出した。尺度得点を求めるにあたっては、得点が高くなるほど尺度名に表された生活意識の内容が強くなるように項目得点をそろえ合計した。
- ⑤ 各尺度の内的整合性信頼性として  $\alpha$  係数（Cronbach, 1951）を算出した。
- ⑥ 6つの尺度得点間の相関行列を因子分析し尺度間の内的構造を確認した。

## 【結 果】

Table 1 は最終的に選択された48項目間の相関行列を因子分析することによって確認された、48項目の因子パターン行列である。以下に各因子の内容を解釈することを通じて因子の心理学的機能について論じる。

Table 1 生活意識項目の因子パターン (Promax 解)

	項 目	家族 情愛	向社 会性	日宗 教性	自己 中心	知的 生活	虚飾 性
v1	家族の絆を大切にしている	0.778	0.046	-0.025	0.152	-0.031	-0.074
v2	家庭を第一に考える傾向がある	0.772	-0.147	0.020	-0.041	-0.068	0.073
v124	親孝行が好きである	0.700	0.061	0.083	0.044	-0.004	0.089
v7	家族思いである	0.586	0.062	-0.013	0.084	-0.050	-0.077
v31	家族のためなら自分を犠牲にできる	0.489	0.112	0.074	0.028	-0.057	-0.067
v96	親の言うことによく従う方である	0.458	0.011	0.103	-0.070	0.047	-0.061
v35	自分のことよりまず親のことを優先する	0.439	-0.043	0.152	-0.034	-0.042	-0.102
v183	家族の悩みは自分の悩みである	0.437	0.130	0.028	-0.087	-0.050	0.096
v99	人のことに一生懸命になったことはあまりない	-0.006	-0.693	0.067	-0.069	-0.037	-0.006
v40	友人や知人のために何か役立ちたい	0.059	0.663	-0.186	0.061	0.024	0.123
v65	いつも相手が喜ぶことを心がけている	-0.050	0.614	0.119	-0.069	-0.040	0.110
v188	悩んでいる人を見ると、いても立ってもいられない	0.073	0.604	0.016	0.013	0.058	-0.029
v179	人のためになろうとはあまり考えない	-0.005	-0.602	-0.112	-0.051	-0.059	0.158
v100	とにかく人の世話をよくする	-0.028	0.499	-0.015	0.032	0.027	0.022
v54	自分の事よりまず相手のことを思う傾向がある	0.095	0.457	0.106	-0.250	-0.105	-0.159
v146	家庭や会などで、人の気持ちを大切に動いている	0.287	0.428	0.070	-0.046	-0.049	-0.013
v123	神や仏を敬（うやま）う心が強い方である	0.047	-0.115	0.730	0.006	0.178	0.111
v110	代々、子孫が続くことを願っている	0.077	0.047	0.651	-0.017	0.018	0.013
v184	神や仏をいつも心に抱いて生きている	0.101	-0.122	0.639	-0.020	0.186	0.152
v46	子孫が繁栄していくことを願っている	-0.025	0.171	0.606	-0.035	0.054	-0.028
v170	この世に神や仏が存在すると確信している	0.031	0.070	0.592	0.025	0.128	0.176
v45	先祖のことをよく供養する	0.036	0.101	0.531	-0.053	0.072	0.069
v58	女性は控えめな方がよいと思っている	0.004	-0.078	0.510	-0.017	-0.201	-0.093
v28	男性は男らしく、女性は女らしくありたいと思っている	0.165	0.008	0.461	0.124	-0.264	-0.060
v83	好き勝手に生きている	-0.168	-0.057	0.209	0.679	-0.210	-0.073
v138	気の向くままに生きている	-0.226	0.096	0.167	0.666	-0.181	-0.056
v68	自己主張が強いほうである	0.166	-0.015	-0.144	0.644	0.180	0.123
v4	自分の思い通りに生きている	0.069	-0.045	0.185	0.639	-0.087	-0.153
v5	自分の意見を押し通す方である	0.183	-0.041	-0.178	0.608	0.034	0.026
v85	家庭や会などで、自分の考えを頑固に主張する	0.064	0.044	-0.067	0.559	0.181	0.150
v176	自分のしたいことは、人が反対しようが実行する	-0.118	0.029	-0.065	0.523	0.202	0.042
v147	冒険をするよりも穏やかに生きるのが好きである	-0.024	-0.059	0.093	-0.477	-0.141	-0.050
v192	一生勉強して暮らすつもりである	-0.030	0.021	0.031	0.129	0.597	0.075
v162	将来のことより、今が楽しければよい	-0.004	0.034	0.051	0.232	-0.564	0.122
v37	教育や文化よりも、娯楽にお金を使う方である	0.035	0.054	-0.086	0.069	-0.554	0.128
v149	はっきりした人生の指針を持っている	-0.026	-0.008	0.041	0.205	0.540	-0.137
v80	学問や文化にたずさわる仕事をしたい	-0.001	-0.054	-0.050	0.202	0.535	-0.056
v159	はっきりした人生観を持っている	-0.022	0.020	0.008	0.287	0.519	-0.151
v112	働くことを惜しまない	-0.131	0.162	0.095	-0.050	0.460	-0.008
v106	勤勉に働くのが好きである	-0.067	0.226	0.126	-0.045	0.403	0.048
v57	物質的な欲が強い方である	-0.062	0.202	-0.039	0.134	-0.186	0.598
v49	すぐ物やお金を自慢する傾向がある	-0.009	-0.020	0.030	0.091	0.016	0.571
v156	お金の欲が強い方である	-0.131	-0.044	-0.024	0.088	-0.131	0.562
v165	いつも人と自分を比べてしまう	0.039	0.105	-0.004	-0.144	-0.023	0.531
v56	体裁（ていさい）をつくろう方である	0.069	-0.058	0.194	-0.121	0.104	0.507
v76	見栄を張ることがよくある	0.029	-0.088	0.136	0.049	-0.058	0.483
v77	物事を、お金がかかるかどうかで決めることが多い	-0.041	0.016	0.060	0.013	-0.119	0.421
v95	人生は何よりもお金であると思って生きている	-0.097	-0.183	-0.001	-0.004	-0.202	0.379
因子間相関		1.000					
		0.405	1.000				
		0.385	0.347	1.000			
		-0.196	-0.196	-0.088	1.000		
		0.156	0.188	0.081	-0.034	1.000	
		-0.069	-0.082	0.157	0.067	-0.066	1.000

### 第1因子 家族への情愛性因子 affection for family

本因子は、「家族の絆を大切にしている」、「家庭を第一に考える傾向がある」、「家族思いである」、「親孝行が好きである」などの項目が高いパターン値を持つほか、「家族のためなら自分を犠牲にできる」、「自分のことよりまず親のことを優先する」、「親の言うことによく従う方である」、「家族の悩みは自分の悩みである」がだいたい中程度のパターン値をもつ。家族への情愛と自分の欲求とが対峙したとき、自己の欲求の実現よりも、家族の思いを優先する傾向を表し、子どもや年下のきょうだいに対しては養育的であり、親や祖父母に対しては孝養といった行動傾性となって表出される。家族を大切にすることが当該個人にとって重要な価値であり、家族のために自分を投機することができる。この因子の持つ心的機能は、家族への強い恩愛や情愛に動機づけられた家族や家庭を大切にしている行動特性を表す。「家族（家族といえども、個人から見れば他者である）のために」が行動の起点になりやすいという意味においては向社会的（prosocial）とも言えるが、他者の範囲が家族にとどまるのか、あるいは家族以外の他者に対しても同様であるかによって、その持つ意味は異なってくる。すなわち、家族集団は通常血縁関係に基づいた集団であり、対社会に対しては利害関係を共有するといった側面があり、家族の問題はいわば当該個人の延長線上にあるといえる。したがって、この特性の働きが家族を範囲とする場合、利己的な要素も動機的な色あいとして強くなる。しかし、家族といえども他者であるから、人格発達の観点からも、家族にさえ恩愛的・情愛的行動傾向の低い個人が、家族以外の他者に対して向社会的であるとは考えにくい。いずれにしても、本因子がどのような心的機能を担った因子であるかは、他の行動特性因子や外的基準との関連の中でより明確になるものと考ええる。ここでは、一応、本因子を動機的な基盤を重視し、「家族への情愛性」と呼んでおく。

### 第2因子 向社会性因子 prosocial behavioral tendency

本因子には、「人のことに一生懸命になったことはあまりない」（負）、「友人や知人のために何か役立ちたい」、「いつも相手が喜ぶことを心がけている」、「悩んでいる人を見ると、いてもたってもいられない」などが比較的高いパターン値をもつ。對他者との関係において、相手の気持ちを理解し、相手のために役立とうとする傾向を表すことから、向社会性因子（factor of prosocial behavior tendency）と呼ぶ。第1因子は、先述のように、「家族のために」という行動特性であるが、本尺度の行動特性は、家族以外の他者に対する向社会的行動特性である。第1因子の家族への情愛性因子と、0.405の因子間相関をもつが、いずれの因子も「自分以外の人のために」行動を起こしやすいか、あるいはそうでないかという意味で、心理的な基盤が共通していると考えられる。人格の発達の観点から考えるならば、社会化の原初的な始まりは親あるいは養育者との相互作用を通じた愛着の形成にあり、その相互作用の大部分は、親あるいは養育者の注意深く、情愛的な行為に支えられながら乳児の社会的相互作用が開発されていき、仲間との相互作用をも順調ならしめる（Damon, W. 1983）。向社会的行動特性もまずは家族との社会的相互作用のなかから人格的な基盤が形成されるという順序性があると考えるのが妥当であろう。また、向社会性は、他者との関係を通じて獲得される他者や社会に対する信頼感に根ざした利他的な行動傾性を表すものといえる。このように考えるとき、家族への情愛性は親（または養育者）の情愛的養育によって育まれるものと考えるべきであり、それが他者への広がりとして普遍化されていくものといえる。したがって、本因子は先の家族への情愛性因子と、因子間相関としては比較的高い相関性（0.405）を示すものと言える。本因子と第1因子は、広義の向社会性という人格的基盤を共有しながら、互いに一次独立な因子として機能するものと考えられる。

### 第3因子 日本的宗教性因子 religiosity of Japanese

本因子は、①「神や仏を敬う心が強いほうである」、②「代々、子孫が続くことを願っている」、

③「神や仏をいつも心に抱いて生きている」、④「子孫が繁栄することを願っている」、⑤「この世に神や仏が実在すると確信している」、⑥「先祖のことをよく供養する」、⑦「女性は控えめな方がよい」、⑧「男性は男性らしく、女性は女性らしくありたいと願っている」といった項目からなる因子である。

項目①, ③, ⑤は神や仏という超越的存在への信仰心であり, 項目②, ④, ⑥は実在した先祖の魂の供養と子孫繁栄という家族の永続性の願いである。本来, 神や仏への信仰と, 先祖供養と子孫繁栄への願いは宗教的には別個のものであるが, この両者が不可分のものとして日本人の宗教性が形成されているものといえる。日本人の宗教観が先祖供養や御利益信仰の要素が強い(金児, 1996) こととも一致するものである。項目⑦, ⑧は, いわば伝統的性役割意識と考えられる。超越的な存在への信仰は, 超越的な存在の絶対性を受け入れ, その意思に従って生きることであり, 自我の無制限な拡張とは相容れないものである。また, 先祖の供養と子孫繁栄の願いは, 世代を超えた家族の安定した永続性の願いであり, わが国では家督の相続は原則として長男(ないしは男系)によって行うことが期待されてきたことから, 伝統的な家族観, それに伴う性役割観と整合するものと考えられる。したがって, 本因子を日本の宗教性と呼ぶことにする。また, この因子は第1因子とは0.385, 第2因子とは0.347の因子間相関をもつ。家族への情愛性因子, 向社会性因子は共に利他的な生活意識にもとづいた行動特性であり, 一般的には善とされる。したがって, これら3因子は, 大きくいえば善の方向性を共有した生活意識として解釈することができるのではないかと考える。

この因子の働きが, 西平(1993)が「地上の権威ではなく神に目を向けること, この考え方こそ, まさに宗教的な人の中核をなすと思われる」と説明されるこの確信は, 言ってみれば, 超越的なものと結び付くことによって, 個人の内的な自立を獲得する」と考察したエリクソン理論の宗教性が, 日本的宗教性においても成り立つのか検証することは, 日本的自我の在り方として極めて興味深い。

#### 第4因子 自己中心性因子 self-centeredness

本因子は, 「好き勝手に生きている」, 「気の向くままに生きている」, 「自己主張が強い方である」, 「自分の思い通りに生きている」, 「自分の意見を押し通すほうである」などが比較的高いパターン値を持ち, 他に「家庭や会などで, 自分の考えを頑固に主張する」, 「自分のしたいことは, 人が反対しようが実行する」, 「冒険をするより, 穏やかに生きるのが好きである」といった項目に中程度のパターン値をもつ因子である。文化や慣習といった規範や, 周囲の期待にとらわれることなく, 自分の心のままに行動するという生活意識にもとづいた行動特性を表す。この因子は, 次のような人格的特徴が考えられる。1つは, ①自分の思いを素直に表現し, 環境に対して積極的にアプローチして自己実現を図るという行動の発現を導くものであり, もう1つは, ②自己の在り方や行動を変えることへの不安から自我感情にこだわり, 他者の意見や考えを受け入れることができず, 結果的に自己の感情を押し通すといった行動の発現を導くものである。前者は, 性格特性では広義の外向性で, 後者は情緒不安定性とそれぞれ人格的基盤を共有するものと考えられる。いずれの場合も, 本因子の人格的機能の主体は, 他者との関係の中で, 他者の感情や思いを理解し自己の感情や動機をそれと調節し, 調和的な行動をとるといった自我機能が働きにくいという点にあるといえる。①と②どちらの心的機能が優位であるかによって本因子と他の人格特性との結合図式が異なってくる。いずれにしても, 本因子は, 自分の感情や考えを中心とした非協調的, 非調和的な行動傾向となって表れることから, ここでは本因子を自己中心性とよぶことにする。

#### 第5因子 知的生活志向性因子 intention of intellectual life

「一生勉強して暮らすつもりである」、「将来のことより、今が楽しければよい」(負)、「教育や文化よりも、娯楽にお金を使う方である」、「はっきりした人生の指針を持っている」、「学問や文化にたずさわる仕事をしたい」、「はっきりした人生観を持っている」などの項目が比較的高いパターン値を持ち、「働くことを惜しまない」、「勤勉に働くのが好きである」が中程度のパターン値を持つ因子である。はっきりとした人生観や人生の指針を持ち、教育、文化、学問といった知的なライフスタイルに価値を置き、今の楽しさよりも将来に向かって自分を高めることに労を惜しまないという知的向上心に方向づけられた行動特性を表すと考える。長期にわたる努力や研鑽を必要とする教育、文化、学問の意義を認識し、より高い価値の実現に人生を方向づけてゆくといった生活意識である。このような本因子の性質から知的生活志向性と呼ぶことにする。こういった生活意識はまじめさ、勤勉性といった性格特性とも人格的基盤を共有し、享乐的・刹那的な生き方とは相容れない特性と考えられる。

## 第6因子 虚飾性因子 ostentatiousness

「物質的な欲が強い方である」、「すぐ物やお金を自慢する傾向がある」、「お金の欲が強いほうである」、「いつも人と自分を比べてしまう」、「体裁(ていさい)をつくろう方である」、「見栄を張ることがよくある」といった項目が比較的高いパターン値を持ち、「物事を、お金がかかるかどうかで決めることが多い」、「人生は何よりもお金であると思って生きている」が中程度のパターン値を持つ因子である。物やお金といった物質的な欲は、人と自分との比較を呼んだり、人より多ければそれを自慢し、少なければ体裁をつくろったり、見栄を張ったりする行為と心理的基盤を一にすることを表す因子である。もちろん、見栄や体裁は物質的なものだけに限らず、学歴、地位、名声といった非物質的な事柄に対しても起こり得る行為である。そして、物質的、非物質的を問わず、欲の強さが人との比較を引き起こし、人より自分の方が満たされていれば自慢し、乏しければ卑下したり、見栄や体裁をはるという心理構造である。しかし、本因子は、物やお金に代表される物質的な欲求や動機に根ざした生活意識が強調される因子である。このことは、先の知的生活志向性因子との関係が、因子間レベルでは $-0.066$ であるが、構成尺度得点間では $-0.204$ と1%水準で有意な相関を示す(Table 2)ことから推察される。非物質的な事柄に対しても本因子の心理機能が普遍化されるのかは今後の妥当性研究に委ねなければならないが、大平(1990)は、生の感情の衝突を避けるために物を媒介とした人間関係しか持てない現代人の精神構造について論じているが、特に物質的なものへのこだわりが自我のあり方として特別な意味を持つものかは極めて興味深いところである。また、藤村(未発表)は、生活意識6尺度の妥当性研究の一環として5因子モデルの性格特性との関連性について分析中であるが、虚飾性尺度と情緒不安定性が有意な相関を有し、因子分析の結果、これらが一つの共通因子として抽出されることを確認している。この問題については今後さらに検討する予定である。

## 2. 生活意識尺度の統計的性質

Table 2 生活意識構成尺度の平均値、標準偏差および尺度間相関の有意性

尺度名	家族への 情愛性	向社会性	日本的 宗教性	自己 中心性	知的生活 志向性	虚飾性	平均値	標準偏差
家族への情愛性	1.000						24.781	5.548
向社会性	0.443**	1.000					27.062	5.133
日本的宗教性	0.427**	0.361**	1.000				21.554	6.527
自己中心性	-0.151**	-0.176**	-0.062	1.000			25.892	5.707
知的生活志向性	0.084	-0.179**	0.097	0.084	1.000		23.731	5.485
虚飾性	-0.086	-0.125*	0.173**	0.088	-0.204**	1.000	25.123	5.218

相関係数の有意性については \*\*:  $p < 0.01$ , \*:  $p < 0.05$ .

Table 3 生活意識尺度の因子構造 (Promax 解因子パターン)

尺度名	R1	F2	F3	F4
家族への情愛性	<b>0.720</b>	0.007	-0.066	-0.090
向 社 会 性	<b>0.595</b>	-0.052	0.056	-0.102
日本的宗教性	<b>0.634</b>	0.040	0.023	0.205
自己中心性	-0.003	<b>0.995</b>	0.002	-0.013
知的生活志向性	0.001	0.002	<b>0.983</b>	-0.005
虚 飾 性	-0.010	-0.014	-0.006	<b>0.924</b>
F1	1.000			
因子間相関 F2	-0.197	1.000		
F3	0.182	0.080	1.000	
F4	-0.018	0.123	-0.210	1.000

Table 1 により、生活意識を測定する項目を確定し、これらの項目による各尺度の尺度得点を求め、平均値、標準偏差および尺度間相関行列を求めた (Table 2)。

尺度間相関行列を因子分析し 4 因子を得た。Table 3 はその因子パターンである。6 尺度間の因子分析では、家族への情愛性、向社会性、日本的宗教性の 3 尺度が 1 つの共通因子を構成し、他の 3 尺度はそれぞれ特殊因子として抽出されている。先の 3 尺度の因子構造的関連性の意味については、後に考察する。あとの 3 尺度、すなわち、自己中心性、知的生活志向性、虚飾性は、それぞれ独立に特殊因子を構成するが、知的生活志向性因子と虚飾性因子は -0.210 の因子間相関を有しているが、これは先の因子の解釈でも論じたとおりである。

### 【考 察】

家庭における生活意識尺度、家族への情愛性、向社会性、日本的宗教性、自己中心性、知的生活志向性、虚飾性の 6 尺度が構成された。これら 6 尺度は、尺度間相関 (Table 2) および因子構造的関係 (Table 3) から分かるように、家族への情愛性、向社会性、日本的宗教性の 3 尺度は互いに正の相関 (0.361~0.443) をもち、因子構造的には 1 つの 2 次因子を構成する。このことについて、以下のような、少し大胆な解釈を試みることにする。

西平 (1993) は、エリクソン理論における宗教的であることの発達の意義について、「<わたし> がわたしを超えたもの>との関係のなかで<わたし>を超え出してゆく」(p. 165) ことにあると考察する。その原型は、乳幼児と母親との関係のなかにあり、母親 (養育者) なしには生きられない乳幼児にとって、母親 (養育者) の自分に対する養育的な行動との関わりのなかで自己のなかに基本的信頼感を獲得してゆく。西平のいう<わたしを超えたもの>は、発達過程において出会う、その個人にとって重要な人であるといえる。そして、最終的には絶対的・超越的存在である究極的他者としての神や仏へと転換してゆくものと考えられる。いいかえるならば、神や仏という超越的存在を自己の中に受け入れる素地は、個人の発達過程における<自分を超越する>他者との関係のなかで養われるものといえる。

家族への情愛性は、家族という身近な他者への情愛的な生活意識を表す行動特性であるが、それは、<わたしを超えたもの>としての家族 (特に親) の信頼に足る情愛的な養育行動によって形成されるものと考えることができる。また、向社会性は基本的信頼感に根ざした他者への利他的行動であり、他者への情愛的行動の発達のな広がりと考えることができる。

このように考えると、これら 3 尺度が、心理学的に人格的な基盤を共有している姿として、高次の人格次元において一つになることが十分理解できるところである。本生活意識の尺度において、このような解釈が妥当かどうか、今後自我同一性研究との関係のなかで、あるいは人格の構造的研究のなかで検討する予定である。



## 引用文献

- 秋葉英則 (1995). 現代青年の行動様式と価値観 フォーラム A。
- 東 洋・柏木恵子・R. D. Hess (1981). 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会。
- Cronback, L. J. (1951). Coefficient alpha and the internal structure of tests. *Psychometrika*, 16, 297-334.
- Damon, W. (1983). *Social and Personality Development*. W. W. Norton & Company. (山本多喜司編訳 (1990). 社会性と人格の発達心理学 北大路書房。)
- Eizenberg, E. and Mussen, P. H. (1989). *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克子訳 (1991). 思いやり行動の発達心理。金子書房)
- Erkson, E. H. (1959). Identity and Life Cycle: selected papers. *Psychological Issues*, Vol. 1, No. 1, International Universities Press. (小此木啓吾他訳 (1973). 自我同一性 誠信書房。)
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and Society*. (2nd Ed.) W. W. Norton & Company. (仁科弥生訳 (1977・1980). 幼児期と社会 I・II みすず書房)
- 藤島 寛 (2002). 宗教性を含む人生観尺度の検討(1) 日本心理学会第66回大会論文集, p. 52。
- 金子暁嗣 (1997). 日本人の宗教性——オカゲとタタリの社会心理学—— 新曜社。
- 神村栄一 (1999). 心理学辞典 有斐閣 p. 686。
- 西平 直 (1993). エリクソンの人間学 東京大学出版会。
- 大平 健 (1990). 豊かさの精神病理 岩波新書。
- 園原太郎編著 (1980). 認知の発達 倍風館。
- 詫摩武俊・依田 明 (1962). 性格 大日本図書。
- 辻岡美延・村山 繁 (1975). 価値観の六次元——因子的真実性の原理による尺度構成——関西大学社会学部紀要, 7, 161-174。
- van Bakel, H. J. and Riksen-Walraven, J. M. (2002). Parenting and development of one-year-olds: Links with parental, contextual, and child characteristics. *Child Development*, 73, 256-273.
- Yarrow, M. R., Scott, P. M. and Waxler, C. Z. (1973). Learning concern for others. *Developmental Psychology*, 8, 240-260.

注：本研究は平成14年度大坂樟蔭女子大学特別研究費の交付を受けて行われたものである。

# The Structure of Values in Daily Life at Home

## —Construct of Psychological Scales—

*Kazuhisa Fujimura*

**Abstract:** To investigate the influences of values in daily life at home to personality development of their children, in this paper, six psychological scales to measure values were constructed and discussed about their personality structural and personality developmental means. These six scales were ①Affection for family, ②Prosocial behavior tendency, ③Religiosity of Japanese, ④Self-centeredness, ⑤Intention of intellectual life and ⑥Ostentatiousness. And these coefficients of internal consistent reliability were 0.829, 0.821, 0.836, 0.812, 0.770 and 0.753 respectively.

**Keywords:** values in daily life, personality development, construct of scale